

地方公務員 file

風を起こす

自分らしい生き方で拓いた
「女性初」の道

八戸市総合政策部中心市街地活性化推進室長

風張 知子さん

北国の春はにぎやかだ。雪の下でじっくり蓄えられたエネルギーが、春の陽を受けて一斉に花開く。

八戸市職員としていくつもの「女性初」の管理職を務めてきた風張知子さん。どれほど厳しい方かと思いきや、穏やかなほほえみで迎えてくれた。妻として、一男一女の母として、実りある人生を送りつつ仕事にも誠実に取り組んできた。肩ひじを張らず自然体で積み上げてきた一つ一つが、思わぬステップアップにつながった。

家事や育児を言い訳にしない

風張さんは高校三年の夏、父を亡くした。県内トップレベルの進学校で級友の誰もが大学へ進む中、大黒柱を失った家族を慮り、涙を飲んで進路変更を決めた。地元企業の採用試験は既に終了している時期、これからは公務員がいいと思うよ、という担任教師のア

ドバイスもあって市役所の採用試験を受験。採用三名に競争率約五〇倍という狭き門をみごと突破し、八戸市職員になった。

「特に高い志があつて入庁したわけはありません。でも、仕事に対しては改革志向だったかもしれない。前例どおりだともつまらなくて、少しでもいいから改善していくことに仕事の面白さを感じていました」



[かざはり ともこ]

青森県八戸市生まれ。県立八戸高等学校卒業後、八戸市役所に入庁。総務課、秘書課、出納室、管財契約課を経て、平成10年女性青少年課女性行政担当、平成13年男女共同参画室長。平成15年から3年間東京事務所所長を務めた後、観光課長を経て現職。18年前から続けている趣味の短歌では、地元の短歌結社「国原」にも所属し腕を磨いている。



入庁2年目の秘書課時代。当時の市長と市議会議長と（中央が風張さん）



八戸女性まちづくり塾の皆さんと。この中の多くの女性は現在審議会委員や各分野で活躍中（前列右から3番目が風張さん）

二四歳で結婚、二度の産休を経て復帰した後も、家事や子育てを理由に仕事をおろそかにすることはなかった。

「夫は民間企業に勤めているのですが、部下の女性たちが家事や子育てを言い訳に仕事に甘えて困ると漏らしている。私には仕事への真摯な姿勢を望んでいました」

ご主人の提案で結婚当初から家事は夫婦で分担。子育てには義姉や母のサポートもあった。だからと言って仕事での成功や出世を目指していたわけではない。総務課、秘書課、出納室、管財契約課と与えられた仕事に対し、自分なりに考え一生懸命取り組む、ただそれだけだった。

まちづくりに不可欠なもの

平成一〇年、風張さんは女性青少年課に異動し女性行政担当になった。

「当時、女性の仕事は庶務や窓口業務が主なものでした。お茶汲みや朝の掃除は女性だけで、定年退職前日の女性職員でさえ、朝の掃除をするのが当たり前前。かたや男性は新卒で入ってもやらぬ。それでも、私自身は男女の仕事が違うのは仕方がないとやり過ぎていましたから、男女共同参画で何をすべきか正直、戸惑いました」

そんな風張さんの心を衝き動かす出

来事があった。青少年問題協議会にお茶出しをした時、八〇歳を過ぎた連合婦人会会長以外は全員男性という委員たちによって、昨今の子ども非行の原因は女性の社会進出によるもの。共働きの子どもは非行に走りやすい、という結論が導き出されたのだ。

「子どもの非行はテレビ番組やゲームにも原因があると思っていましたから、この結論付けには驚くと同時に不安を覚えました」

P.T.A活動で知り合った母親たちは皆、子どものことを真剣に思い、子どものためならば学校への協力も惜しまなかった。その思いに専業主婦も共働きも関係ない。むしろ、青少年問題を考える場に彼女たちの考えが反映されないことのほうが問題ではないか。

市の審議会における女性の登用率はわずか七%。審議会委員一〇人が全員男性ということも珍しくなかった。しかも、連合婦人会の会長さえ入れておけばすべての女性の意見が反映されるかのように、一人の女性が一〇以上の委員を兼務していることもあった。

「いいまちづくりをするためには、審議会のような政策方針を決めていく場に女性の参画は欠かせない！」

自らやるべきことが見えた風張さんは早速、動き出した。国では平成一一年によろやく「男女共同参画社会基本

法」が制定されたばかり。「男女共同参画」という耳慣れない言葉は、過激なウーマンリブのイメージに重ねられ、男性職員はおろか女性職員の中にも煙たがる人が少なくなかった。その一方、理解を示し大きなヒントを与えてくれた男性上司もいた。

「審議会に女性を登用するには、周囲を納得させるための肩書も必要なんじゃないのか？」

風張さんが企画から携わり平成一三年度から一九年度まで市の事業として実施した「はちのへ女性まちづくり塾」は、政策方針決定の場への参画やまちづくりなど実践活動ができるような人材育成とともに、修了生であることが肩書にもなった。

また、それまでは有識者など決まったメンバーだけで構成されていた審議会に公募制を取り入れた。

「政策方針決定の場を、男女関係なく、まちづくりを真剣に考えているいろいろな分野、考え方の人が参加できる場にする。すべての人への機会均等、これは私が一番やりたかったことであり、力を入れたところですよ」

平成一三年に行われた「八戸男女共同参画都市宣言」の起案にあたっては、男女共同参画室長として部下に何度も書き直しを命じた。練りに練って出来上がった宣言文の一文に、その思

福祉と男女共同参画を学ぶため
2000年にヨーロッパを視察



いが込められている。

——男だから女だからにとらわれず

自分らしく生きていきたい——

この宣言文が読み上げられてから八年経った現在、審議会における女性の登用率は目標の三〇%まであと少しの二六%までできている。

大きな糧となった 三年間の単身赴任生活

男女共同参画への取り組みが徐々に効果を見せていた平成一五年春、風張さんに大きな選択を迫るカードが回ってきた。転勤を伴う八戸市東京事務所所長のポスト。折しも長男が大学受験を控えた高校三年に進級する年だった。「さすがの夫もこれには反対しましたが、当の息子が応援してくれて。自分のことは自分でするから、お母さんが行ったほうがいいなら行ったら？」

つて。それに私の母も夫に、娘を東京に行かせてほしい。家事は手伝うからと頼んでくれたみたいで」

お母さんの胸の内にはずつと、大学進学をあきらめ八戸に残ってくれたことが引つ掛かっていたのだろう。風張さんは悩んだ末、東京への単身赴任を決めた。

「男女共同参画、機会均等を進めてきた私が今ここで断つてしまえば、やはり女性に転勤を伴う仕事は無理」と、後輩たちの道を閉ざしてしまうことになりかねませんから」

東京事務所所長としての仕事は、八戸市の取り組みを機会あるごとにPRして、企業誘致や観光振興につなげていく、いわば八戸市のセールスマンのな仕事のほか、霞が関などへ足を運び情報収集することも重要な任務の一つだった。

地方とは比べものにならない圧倒的な情報量に大いに刺激を受けた風張さんも、機動力を求められる民間企業相手にも、所長として自ら決定権を持つて迅速に対応した。やりたいことが思いきりやれるという環境の中で、水を得た魚のごとく活躍し、目まぐるしい時を過ごした。中でも意欲的に取り組んだのは、首都圏で活躍する八戸市出身者のネットワークづくり。

「皆さん地元を離れている分、より強

く郷土愛を感じているらしく、八戸のために何か貢献したいと言ってくださつて心強かったですね」

男女を問わないネットワークに加え、女性たちだけのネットワーク、エイトの会も結成した。経済界の会合などで接触する機会が多い男性に比べ、女性にはお互い知り合う機会が少ない。そこをつないでみたいという発想は女性所長ならではのほう。

市レベルで東京事務所所長を女性が務めたのは全国でも初めてのこと。「女性所長」は物珍しさもあって、大きなアピールポイントとなった。八戸市が「男女共同参画」に力を入れていることも自ずと伝わる。

当時、東京事務所を置いていた六四市が一堂に会した場で、紅一点の存在は際立っていた。各市の所長が一人ずつ抱負を述べた際、これまで妻に任せきりだった家事を東京にいる間に身につけたいという男性所長に対し、風張さんは「わざわざ東京で身につけてもいいのでは？」と鋭いツッコミを入れた。

家事が負担になっている男性所長とは対照的に、家事から解放された風張さんはプライベートの時間を存分に満喫。休日を利用して全国各地を見て回った。修学旅行で訪れた倉敷より西の地域にも初めて足を踏み入れた。海外

東京事務所所長時代。世田谷区民祭りにて八戸をPR



へは公私を含めて出かける機会もあったが、国内は意外と知らない土地が多い。各駅停車の一人旅は完全なフリープランで、気になった駅で降り、そこが気に入れば一日過ごすこともあるし、二〜三時間だけ散策してまた別の土地へ足を向けることもある。

「自分の足で歩くことでいろんな発見ができるんですね。でも、一番強く感じたのは、八戸は本当にいいところだな」ということ。全国に発信すべき

魅力がたくさんある」と気づいたことが最大の収穫でした」

実行なきところに成功なし

三年間の単身赴任で培った経験は、すぐさま仕事で活かされることになる。

平成一八年、八戸市初の女性観光課長に抜擢されたのだ。とにかく八戸を売り出したいくて仕方がなかった」という熱い思いを原動力に、観光行政に力を注ぐ毎日。企業とのタイアップによる宣伝事業では、SMA Pの香取慎吾さんのテレビ番組で観光課長役を務めるという貴重な体験もできた。

「温故知新じゃなくて温故活新。つくられたものではなく、素のままの八戸の面白さを活かしていければ」

外部へ向けた発信と同時に必要になってくるのが、内部の活性化。多くの地方都市が抱える「中心街の空洞化」の悩みは、八戸市でも同じだった。昼間のシャッターが目立つ中心街活性化の起爆剤として、市では「八戸ポータルミュージアム（愛称：はっち）」の建設を決めた。観光情報の発信に加え、市民活動スペースを備えた施設。ハコモノ行政への逆風の中で、事業を統括するのが中心市街地活性化推進室。その室長として、風張さんは平成二〇年の就任以来、奔走している。

「中心街は八戸の顔であり、晴れの場です。かつてのあのにぎわいをもう一度取り戻したい。個々で頑張っている市民の力をつなげられれば、すごいパワーが発揮できるはず。そのコーディネート役を果たすが、私たちの役目なんです」

素晴らしいアイデアがあったとしても、思っているだけでは何もしていないのと同じ。後悔するような仕事だけはないのがポリシーだという。ではあるが、髪を振り乱してまではやらない。あくまでも自然体が基本。

「男勝りなタイプでもないし、女性を武器にするわけでもない。自分の持ち味を活かしつつ、仕事もプライベートも充実させたい」

ワーク・ライフ・バランスなんてご大層な言葉が登場するずっと前から、その姿勢を貫いてきた。八戸市の観光スポットになっているみろく横丁やハモニカ横丁。仕事を終え、地元の人情にふれながら一献傾けるのがストレス解消になっているという。

一〇年前には男性ばかりだった企画部門に最近、女性の姿が目立ち始めた。その先頭を走るプレッシャーは相当なものだろうが、たおやかに、しなやかに、凛として、風張さんは確かな足跡を残している。

（取材／ライター・更田沙良）